



掲載号・キーワード・執筆者	内容
<p>その 28 (ニューズレター No.95 : 2019.5.30 発行)</p> <p>「城下町」</p> <p>後藤 隆太郎 (佐賀大学 理工学部 准教授)</p>	<p>桃山時代から江戸時代初期の同一時期に（おおむね 300 年以上前）、我が国では 200 以上もの城下町が各地に建設されました。城郭を中心に、武家地、町人地などの封建的な社会と対応する空間構成、河川や水路など平地や湿地を可住地とする建設技術、また、周囲での新田開発とも関わりのある都市開発です。「城下町」は 1 つの優れた都市モデルであり、加えて、現代の主要都市のほとんどがこの城下町の都市基盤を活用していることも大きな特徴です。</p> <p>基本的に個々の建物は更新しているため、歴史的な町並みの維持は保存的な取り組みが成された一部の地区に限定されます。しかし、戦災や大規模開発の影響が少ない佐賀などの地方都市では、古地図をもって町歩きをすると水路や道の骨格が基本的に温存され、「城下町」を身近に感じることもできましょう。天守閣は分かりやすい城下町のシンボルですが、水路や道路網は現役で使い続けられる生きた遺産であり、これもまた大切にすべき存在です。</p>
<p>その 29 (ニューズレター No.96 : 2019.9.30 発行)</p> <p>「武家地と町人地」</p> <p>後藤 隆太郎 (佐賀大学 理工学部 准教授)</p> <div data-bbox="147 912 432 1098">  </div> <p>写真1 武家地</p> <div data-bbox="147 1106 432 1291">  </div> <p>写真2 町人地</p>	<p>我が国の都市の多くは低平地における城下町を起源とし、東京、大阪、福岡、そして佐賀なども同様です。いずれも城郭を中心に、その周囲に武家地、さらに町人地と社会階級を踏まえたゾーニングがされました。</p> <p>佐賀を例にすると、「武家地」は現在の城内やお堀の四方を囲むように北堀端小路、西堀端小路、中ノ小路、八幡小路など、「小路」と呼ばれる空間・社会単位で構成されました。これらは規模の大きな屋敷地の集合で、建物や機能が更新されているものの、その佇まいは今日においても裁判所や知事公舎のある界限、水ヶ江などの病院や屋敷のある界限として感じるすることができます（写真1）。</p> <p>一方の「町人地」は、城下町を東西に貫通する長崎街道沿いに配された柳町、呉服町、白山町、中町、六座町などです。武家地と比べ各敷地が小さく、特に間口が狭いことが特徴です（写真2）。道がやや狭く、現代の住宅地と異なる敷地形状などのため、今日、空き家や空き地が目立ちます。かつての高密度な住形式を再構築するなど、ここを現代的に住みこなすことは低平地都市の持続にとっても重要です。</p>

※執筆者の所属等はその当時のものです。